カルチャーオンラインツアー

京都嵐山③　落柿舎～念仏寺

０：００　こんにちは、てれんぽの井上ゆき子です。
後ろに見えます紅葉、みなさんご覧になっていただけますか。
今、非常に美しい紅葉、嵐山の大河内山荘（おおこうちさんそう）の目の前におります。
今回の動画は、落柿舎（らくししゃ）から化野念仏寺（あだしのねんぶつじ）までのエリア、小倉山（おぐらやま）百人一首（ひゃくにんいっしゅ）で有名な、小倉山のエリアをご案内したいと思います。
それでは、動画のほうスタートいたします。

０：５８　では、柿も実っておりますが、こちら「落柿舎（らくししゃ）」でございます。
松尾芭蕉（まつおばしょう）のお弟子さんの一人、向井去来（むかいきょらい）さんが住んでおられたとされる場所でございます。
ご覧のように柿の木がございまして、たわわに実っているということでございますが、柿を売る商人の方がこちらのほうにとお訪ねになられました折に、このたわわに実った柿を、これをすべて買い取るということでお話がつきました。
そして翌日に持っていっていただく予定だったのですが、ひと晩に嵐が来まして、そして翌朝にはすべて落ちてしまっていて、結局は商品にはならなかったのですけれども、ひと晩でその契約が済んでいる柿が落ちてしまったということにちなんで、「落ちる柿の舎」ということで、「落柿舎」というお名前になっているところでございます。

さて、そのような落柿舎の周辺から、お隣は嵯峨天皇（さがてんのう）の娘と書いてございますが、御陵（ごりょう）になってございます。このような陵も至るところにと設けられつつ、そしてさらにこちらは公園として整備をされている周辺ということになっております。

小倉山ふもとということでございますが、「小倉あん」ということでよく知られておりますね。
実は、「小倉あん発祥の地」ということにもなってございまして、看板などでそちらのほうのお知らせをしているところにもなってございます。
小倉あんはいろいろなものに使われておりますけれども、やはり京都も京菓子がございますが、あんを使っているものも多いですよね。そんな小倉あん、こちらのほうで生まれたということでございまして、京名物にお召し上がりをいただいたりするのも宜しいかもしれません。

３：１１　さて近年になりまして、百人一首（ひゃくにんいっしゅ）かるた取りのほうは、非常にお若い方にも人気になっています。
と申し上げますのが、映画の影響などもあるようでございまして、それは元々は漫画から始まっているようなのですが、「ちはやふる」という、こちらのほうなどは映画も撮られました。

会場となっているのは、おとなり滋賀県の近江神宮（おうみじんぐう）ということになるのですが、そちらのかるた取りということで申し上げましたら、その小倉百人一首がもちろん使われているわけでございますので、その元となりました、定家のいらっしゃいました周辺をお訪ねになられる方も多いようです。

最近は「聖地めぐり」ということでございましてね、歌の詠（よ）まれた場所というのを訪ねられる方も多いようです。

京の都で詠まれたものもあれば、宇治（うじ）の奥のほうで詠まれたところも、はたまたお隣は奈良・大和（なら/やまと）のほうに行かれたりとか、様々なところで詠まれた素晴らしいお歌を選定しているということでございまして、小倉百人一首の名前で知られることとなりました。

そのような周辺を、石碑を設けて案内をしているところが、この先の左側の公園にもなっております。
一つひとつを詠んでいただきながら、その世界観を楽しんでいただくというのも宜しいようでございます。

そしてこちらのほうは、その公園の石碑を巡っていただきながら、奥のほうまでお歩きいただきましたら、山麓の雰囲気を存分に味わっていただけるところとなり、当時の時代の方々に思いを馳せていただくことができるといったような場所になるのですが、小倉山自体は登る山ということではなく、眺めていただくというような山でございましたので、妙土（みょうど）のほうでそのように庵（いおり）を結ぶことは許されましたが、山にお入りをいただくということではなかったようでございます。

５：３０　さて、先ほどご紹介を申し上げました山号（さんごう）は、同じく「常寂光寺（じょうじゃっこうじ）」のほうも小倉山を使い、そしてこちらの「二尊院（にそんいん）」も同じく小倉山を山号となさっているところでございます。

二尊院というお名前でございますが、釈迦（しゃか）・阿弥陀（あみだ）の二尊をお祀（まつ）りするということでございまして、二尊院の名前で知られるところとなっております。
こちらも「勅願（ちょくがん）のお寺」ということでございまして、格式の高いところとなっております。
天皇皇后両陛下もお越しになられてといったような場所でございました。

こちらのほうは、「四宗兼学（よんしゅうけんがく）」と呼ばれるところでございまして、平安時代には奈良のお寺さんを置いてきまして、新しく「天台宗（てんだいしゅう）」と「真言宗（しんごんしゅう）」が許されることになりました。
天台宗は比叡山延暦寺（ひえいざんえんりゃくじ）、伝教大師最澄（でんぎょうだいしさいちょう）によって開かれ、真言宗は弘法大師空海（こうぼうだいしくうかい）ということでございまして、それぞれ二つの新たな宗派が生まれてございます。

奈良に置いてきた「南都六宗（なんとりくしゅう）」と呼ばれる法相宗（ほっそうしゅう）・華厳宗（けごんしゅう）・律宗（りっしゅう）・成実宗（じょうじつしゅう）・三論宗（さんろんしゅう）・倶舎宗（くしゃしゅう）といったような中で、律宗のほうなどや、また法相宗のほうなどは、その後も”勉強の宗派”ということで、奈良の都のほうでそのまま盛んでありましたが、新たに開かれるものでは少のうございました。

そのように大きく宗派が分かれることとなっておりますが、天台宗と真言宗と、そして南都六宗のひとつの律宗、さらには鎌倉時代に始

まりました浄土宗（じょうどしゅう）の、これらの四宗の兼学の場となっておりましたので、そのような修行の場ともなっているところでございます。
釈迦・阿弥陀の二尊を祀（まつ）るということでご紹介を申し上げましたけれども、そのような二尊院を後にしてまいります。

7：50　私たちはこのまま進めていきますが、少しこちらから道を分かれてまいりますと、瀬戸内寂聴（せとうちじゃくちょう）さんの「寂庵（じゃくあん）」方面にも連絡をしているところでございます。

そして、道が整備をされております石畳になっておりますこの道からこの先、化野（あだしの）と呼ばれる方面にと連絡をしてまいります。
都に亡くなった方をそのまま置いておくことができませんでしたので、都の外に風葬地（ふうそうち）というものが設けられました。
大きく分け、３ヶ所ございます。

西は、この今から向かう化野、そして北は蓮台野（れんだいの）、現在紫野（むらさきの）と呼ばれる地名になっておりますが、有名どころで申し上げましたら、大徳寺（だいとくじ）さんなどがある周辺でございます。
そして、東は鳥辺野（とりべの）。鳥辺野は、現在の清水寺（きよみずでら）の周辺ということでございまして、清水寺もまたちょっと珍しいのですが、北法相宗（きたほっそうしゅう）という単立（たんりつ）の宗派のお寺さんになっておりますが、懸崖造り（けんがいづくり）で有名な清水寺の舞台から下と申しましたが、今の紅葉の時期、春の桜の時期に楽しんでいただける場所となり、またあの有名な「清

水の舞台（きよみずのぶたい）から飛び降りる」などといったようなお話でも知られるわけでございますけれども、そちらも風葬地でございました。

そのように３ヶ所設けられておりました風葬地ということですので、亡くなった方をそのまま葬るような場所であったわけでございます。化野念仏寺におきましては、そういった方々をお祀りする場所にもなってございますので、小さな石像が、こちらのほうには所狭しと並んでいるところともなっておりまして、千灯供養（せんとうくよう）などでも知られるところになっております。

１０：００　そして、こちらのほうの愛宕街道（あたごかいどう）のほうは、愛宕山（あたごやま）のほうにとお上がりに行っていただく方々がお通りになられました。
愛宕山は、今現在は登山で上がっていただくということになっておりますが、愛宕神社（あたごじんじゃ）のほうにお詣（まい）りになられる方が多い場所です。
時折小さなお子さんを連れていらっしゃるという方もあるのですが、それには理由があります。
愛宕神社は火伏（ひぶ）せの神、火除（ひよ）けの神となっておりまして、京都のお店屋さんなども、「火迺要慎（ひのようじん）」という札を飾っております。
これはもちろん、火事に遭わないことを願ってということになるのですが、子供さん、小さいお子さんを連れて上がられるというのは、３歳までに愛宕山に登ると、一生火事に遭わないとされておりますので、そんなところで、子供さんを連れて上がっていらっしゃるということでございます。

さて、こちらにも分岐点がございます。
祇王寺（ぎおうじ）、また、滝口寺（たきぐちでら）、檀林寺（だんりんじ）といったような分岐となってございます。

１１：１６　「祇王寺（ぎおうじ）」もまた、平家物語（へいけものがたり）に出てくるお話で知られるところでございます。
源平合戦（げんぺいがっせん）のことを書かれてございます平家物語、また時の権力者となってまいりますと、もちろん「平清盛公（たいらのきよもりこう）」、平清盛が寵愛（ちょうあい）をいたしました「祇王（ぎおう）」でございますが、白拍子（しらびょうし）、現在で申し上げるならば、舞妓（まいこ）さんのような方でいらっしゃいます。

この方を非常に寵愛いたしましたので、どのように素晴らしい方が来られても、その舞を見たいと望むことはなかったようなのですが、ある時「仏御前（ほとけごぜん）」という白拍子が来まして、時の権力者であるこの平清盛に、ぜひ自分の舞を見ていただきたいと、これは純粋に舞を見ていただきたいという思いだったのかもしれません。
しかし、仏御前のその要望には応えず、「自分には祇王がいるからそれは必要ない、見ることもない」といったように仰います。
その様子をご覧になっておられました祇王さんは、同じく自分と職業が同じですね、白拍子ということでございますので、「そんなことを仰らず、ぜひ見てあげてください」と、同じ立場で、同じ白拍子という職業の立場として、それをお願いしました。
すると、「愛する祇王の言うことならば」とお聞きになられた平清盛、いざ実際に目の前に仏御前の舞をご覧になると、それがあまりにも素晴らしく、そして逆にすごくお気に召されたわけですね。

そしてまた、お屋敷に住むようにと勧めるわけでございますが、仏御前からすると、自分のお願いだけでは聞き入れてもらえなかったところを、祇王さんのおかげで見ていただくことができた、恩を感じるということもあったようで、「祇王さんがいらっしゃるので、私はそれはできません」と丁重にお断りするのですが、男性のほうの立場から見ると、「祇王が邪魔なのか」と、逆に捉えてしまわれたのかもしれません。

そこで、祇王たちは屋敷を出されることにとなってしまいました。
屋敷を出ることになった祇王は、ただそうは言いましても仏御前を恨むわけではなく、妹の妓女（ぎじょ）さん、お母さんの刀自（とじ）さんと共に、こちらのほうに屋敷を構えることにいたしました。
それが、”祇王寺のはじまり” ということになります。

１４：１２　女３人で過ごす日々、そしてこちらのほうで修行に勤しんでおられたわけでございますが、ある時にトントンと訪ねるものがありました。仏御前でございます。

仏御前は、寵愛を受けていた状態ではありましたが、自分たちもきっと「〽 萌えいづるも 枯るるもおなじ 野辺（のべ）の草 いづれか秋に あはではつべき」といったようにお歌などにも残されておりますように、自分もいつか同じことになる、また栄枯盛衰（えいこせいすい）ということでございまして、そのように盛り上がった時期もあれば、そうでない時期もあるということをすでに悟っておりまして、ご自身も仏門に入りたいと訪ねてこられたということです。
祇王さんたち、お三方と共に仏御前も入られて、こちらのほうでお過ごしになられたと、そんなお話が平家物語などでも紹介されている

ところでございますね。

そして、そのような祇王寺は苔を生しておりますので、しっとりとした趣で、私も個人的には好きなお寺ということでございましてのご紹介でございました。

それから少し歩いてまいりましたが、「北山杉（きたやますぎ）」の姿なども見えてございます。
京都のお家などにもよく見られておりますが、京都の府の木でございます。
北山杉、こちらのほうが育ってまいりましたら、一般の普通の杉の木と変わらないのですが、若いうちは細く枝が分かれてまいりまして、まるでぼんぼりのようにですね、ポンポンと枝が集中しているのが特徴にもなっております。
ですので、割と大きなお店とかにもよく構えられているかなというところでございますけれども、そのようなお姿を見ていただきつつ、念仏寺（ねんぶつじ）へのはたまた分岐ということにとなってまいりました。

１６：１８　「鳥居本（とりいもと）」といったように呼ばれる周辺にもなっているのですが、鳥居というのはもちろん、愛宕神社の鳥居の麓なのですけれども、こちらの近くにある「曼荼羅山（まんだらやま）」は、鳥居の形が刻まれております。

「五山送り火（ござんのおくりび）」のひとつでございまして、大変有名な「大文字（だいもんじ）」、８月１６日の午後８時に点火をされますと、以前は１０分空けておりましたが、数年前から５分ごととい

うことに変わりました。
松ヶ崎（まつがさき）の「妙法（みょうほう）」に８時５分に点火をされると、５分遅れまして西賀茂（にしがも）の「舟形（ふながた）」、さらに５分遅れまして、金閣寺（きんかくじ）の後ろ大北山（おおきたやま）の「左大文字（ひだりだいもんじ）」、そして８時２０分に曼荼羅山（まんだらやま）の「鳥居形（とりいがた）」に火が灯（とも）されるということで、お精霊（しょらい）さんと呼ばれる先祖の霊たちを、再び冥土に送り返す、そしてお迷いになることがないような目印となっていたものが、このように点火をされることになったのですが、通常のところは火床を設けているのですけれども、そこに火を灯していく形を取っていますが、曼荼羅山の鳥居形は、火を点けた松明（たいまつ）のようなものを担いでですね、そちらのほうを入れていくというスタイルを取っておりますので、”火が走る” などといったように表現をされるところです。

１７：４５　そんな曼荼羅山の麓（ふもと）でもあるということでございますが、そんな「鳥居本」と呼ばれる地域でもございます。
街道は、昔ながらの良さをまた留めておりますような周辺でございます。
それらを利用いたしましたお店屋さんの姿などもあり、また「まゆ村」と呼ばれるところがこの先にもありますが、京都のキャラクターに、公式キャラクターに「まゆまろ」というキャラクターがおりますが、蚕（かいこ）の繭（まゆ）の形をしている可愛らしいキャラクターになっています。

それと同じく、こちらのほうなどはそのようなキャラクターを想像させるような可愛らしい手作りのお品などを取り扱っているお店に

もなっていますが、そちらのほうを越えてまいりました先に、「念仏寺（ねんぶつじ）」が控えてございます。

１８：４２　さて、風葬地とご紹介を申し上げました「念仏寺」は、やはりこちらのほうはそのような場所でございますので、中のほうなどの撮影はなかなかできないようになっております。
「千灯供養（せんとうくよう）」ということでございまして、供養をなさるため、同じく８月１６日、またこちらのほうなどは、先祖の霊を慰めるためにも、またお迎えをし送るためにも、火が灯されるといったところでございました。

この街道を進めてまいりますと、ご宿泊や、またお食事などを楽しんでいただけるところなども設けられてございます。
時折、自動車道のほうに抜けていただけるような道も設けられていますが、こちらのほうを平行いたしまして通っております道からは、高雄（たかお）と嵐山を結んでまいりますドライブコース パークウェイの入口、さらにそれを越えてまいりますと、愛宕山への登山道の方面にと連絡をしておりまして、その手前のところには、「愛宕念仏寺（おたぎねんぶつじ）」というところもございます。

「あたご」と書いて「おたぎ」と読ませるのが昔の呼び方のままのようでございまして、そこも苔の中に可愛らしいお地蔵さんの石像などが設けられているところになっております。

２０：１４　そして、石段が見えてまいりました。
ちょうど紅葉の葉が絨毯（じゅうたん）のようになっているところでもございます。

化けるという字に野原の野の字での「化野念仏寺（あだしのねんぶつじ）」、こちらのほうをまた上がっていただきましたら、この左上のところが境内（けいだい）ということにとなってございます。

ではこちら、階段のところで秋の紅葉の景色と共にお楽しみをいただきました。
今度はぜひに、ご自身の足でもお訪ねいただきたいところでございます。ありがとうございました。